

SOSの出し方に関する推進委員会（第3回）議事要旨

【開催日時】 令和6年1月31日（水）午後3時30分から午後4時45分まで

【開催場所】 東京都庁第二本庁舎31階 特別会議室 21

【出席者】 本橋委員長、石川副委員長、小澤委員、牧野委員、伊藤委員、黒後委員、荒川委員（7名）

※ 御欠席 笠原委員、相賀委員（2名）

【事務局】 土屋指導部指導企画課長、福田指導部主任指導主事（生徒指導担当）
濱田統括指導主事（生活指導担当）、西山統括指導主事（生活指導担当）
菅原指導主事（生活指導担当）、宮崎指導主事（生活指導担当）、
駒澤主任（生活指導担当・警視庁派遣）

【協議内容】 SOSの出し方に関する教育を推進する方向性について

1 開会・指導企画課長挨拶

- ・ 文部科学省は、昨年11月24日に「児童・生徒の自殺予防のための協力者会議」をオンラインで開催し、6月に公表した「こどもの自殺対策緊急強化プラン」や、各学校に実施を求めている自殺予防教育の考え方や普及の課題などが議論された。
- ・ 委員からは「子供が周囲に『助けて』と言える安全・安心な風土づくりは、毎日の授業の中でできる」また「全教員に必要とされているというメッセージを打ち出すべき」と指摘があった。
- ・ 本日、協議いただく資料の「教材編」では、子供たちが不安や悩みを自分で抱えず、友達や先生に話せるようにすること、「研修編」では、教員が子供たちのサインの種類やサインを受け止めた際の具体的な対応例などを内容に盛り込んだ。今回も専門的な見地から御意見を賜りたい。

2 委員自己紹介

【黒後委員】

- ・ チャレンジスクールである都立桐ヶ丘高校校長を務めている。本会議の協議内容に関しては、学校からのニーズが高い内容であると感じており、このような貴重な機会をいただき、感謝する。

3 事務局紹介

- ・ 事務局名簿に沿って代える。

4 協議

○ 事務局からの説明

- ・ 教材編は、初等編・中等編・高等編とし、各5分程度の動画を想定している。前回の委員の皆様から御意見を反映し、子供たちが「いつもの自分と違うこと」や「心のSOS」に気付くための「セルフチェック」や、心のSOSを抱えたときの事例などを盛り込み、自分ならどうするかを考えられる内容とした。

- ・ 初等編は、家庭内不和、本を無くして家族に叱られる事例、中等編は、コンプレックス、運動面などの技能面に自信が持てない悩み、高等編では、学業不振・進路の悩みなど、どの子供も思い描けるような身近な内容を取り扱っている。
- ・ 教職員向けの研修動画は、「気付く」と「実践」の2編である。「気付く編」では、教職員が学校で気付きやすいサインについて、実践編は、実際に子供が心のSOSを出した際の教職員のSOSの受け止め方について、「TALKの原則」を中心に具体例を示すようにした。
- ・ 動画は、7～8分程度の長さとなっており、より子供達に分かりやすくするために、内容を精査していく必要があるかなど、各委員の皆様から御意見を賜りたい。

○ 各委員より

【本橋委員長】

- ・ メンタルヘルスのところは、高校生ぐらいになると、色々な悩みが深くなっている時に、うつ的な症状が出てくるということは十分に考えられる。医師の立場から言えば、高等編では、「うつ」を扱うことは、発達段階において必要だと考える。
- ・ 事例では、全員参加型の運動会や部活動など、実際にあった事例を参考として内容を検討していくとよい。その中で、運動能力に微妙な差があり悩みといった内容を取り扱ってはどうか。
- ・ 教職員向け動画は、全体としてはあまり多くのことを盛り込むのではなく、「子供の心の変化に気付くポイント」や「TALKも原則」など、実際に全ての先生方が理解できるような共通の内容に絞っていくとよい。その上でナレーションやテキスト表示で具体的な内容を伝えられるように、内容項目を精査していく。

【牧野委員】

- ・ 初等編の事例で「本を失くした」というところは、心の危機として、じっくりくる内容なのか再考が必要かもしれない。SNSなどの問題も考えたが、いじめや情報教育の内容にかかってくるので難しい。子供に伝わりやすい事例を検討したい。
- ・ 動画のナレーションは語りかけるような口調がよい。また、データのものを子供たちに可視化させて示していくことがあるといいと感じた。
- ・ 教職員向けの「TALKの原則」の内容は、いくつかのポイントになる項目を画面に示して、教職員が意識した上で視聴できるようにするとよい。また、説明や項目で使う言葉では、抽象度の高い言葉でなく、様々な先生方が見ても分かる言葉で説明できるとよい。

【荒川委員】

- ・ 初等編の事例は、例えば、兄弟関係のトラブルとか、家族の大切にしたものを壊してしまったとか、親に言えなくて悩んでいるという内容だと現実的な感じがする。
- ・ 現在、冒頭にあるオレンジの絵から、人によって感じ方が異なるという内容を割愛しても、その後のストーリーは意味が通っている。それならば、「あなたは心がモヤモヤしたことはありませんか」という、子供にとって分かりやすい導入にしてはどうか。
- ・ 教職員向け動画は、校種によって分けなくてもよい。教職員は、自分の学校種ごとの課題や内容を取捨選択して内容を受け止めるので、特に校種ごとに動画を分けなくてもよいと感じる。

【石川委員】

- ・ 図書館の本をなくしたことに悩むことは、大事なことであるが、今回の事例では、友達との信頼関係について考えるなどの内容がよいと感じた。

- ・ スクールカウンセラーとしての事例で、中学校で運動会が近づいてくると、大縄跳びで、みんなが一人ずつ入って行ってクラス対抗みたいな大縄跳びでみんなに迷惑かけると考え、悩みを抱えていた子がいました。そのような現実的な事例を扱ってもよいと考えた。
- ・ 教職員向けの動画は、視聴した後に互いに話し合ったり、取組を見直したりすることを想定しているのだろうか。何か実際にグループワークで使用する資料なども今後、用意していけるとよい。

【伊藤委員】

- ・ 中等編の事例では、部活動を扱ってはどうか。部活だと、勝敗がすごく大きく影響する場面がある。授業中の体育の場面よりは、心の危機を感じる子がいるのではないかと考える。
- ・ 教職員向けの動画内のデータで、平成31年までの10年間の累計から、小学生の自殺の動機などに「家庭のしつけ」を挙げているが、これは、新型コロナウイルスが拡大する前までの累計である。できたら、最新のデータまで累計したものが提示できれば、より説得力があると考えます。
- ・ 子供の心の危機に対して、「気付きのサインがある」ということを教職員が知っておくことは大事なことです。中学校で一番心配なのは「先生だけに話す」「他の先生には言わないでほしい」という子への対応である。その点では、例えば、Keep Safeでは、具体的なポイントを示せると、ひとつの手だてになる。

【黒後委員】

- ・ 今回の高等編の方を見ていて、日々やっぱり悩んでいるのは、子供たちはSOSを出すきっかけがなかなかつかめずに、常に右往左往しているということがある。そのあたりをどう内容に入れていけるか検討できたらよい。
- ・ 高校の中でも様々な立場がある。現在の事例案だと、勉強を頑張っていたけども、伸び悩み、スクールカウンセラーに相談に行くという健全で前向きな内容で進んでいる。例えば、「うつ症状」になっているという内容や設定などを入れてはどうか。
- ・ 教職員向け動画では、授業中の心のサイン、友人関係で現れやすいサイン、行動面でのサインなど、客観的にどうやって教職員が子供の心のSOSをキャッチできるかなという内容が入るとよい。

【小澤委員】

- ・ 「心のモヤモヤ」という、なにか言葉を足せばうまく流れるのかもしれないが、特に小学生には、「モヤモヤ」がどういうことかなという思いを抱かせると考え、モヤモヤがあるとどうなるのかを説明する流れがあるとよい。
- ・ 教職員向け動画の「TALKの原則」の「ASK」で、子供たちに「死にたいほどつらい気持ちを尋ねる」ことで、「子供の行動を促進してしまうのではないか」という意見を聞くことがある。しかし、そこを率直に尋ねることの重要性は、自殺対策の様々な部門では言われている。
- ・ もし、「死」という言葉を出すことが難しいなら、「生きることがつらいのだね」と工夫しながらも正確に尋ねることの内容が「ASK」に入っているとよい。

5 次回予定

- ・ 3月頃に都庁内会議室で開催予定とし、日程は、事務局より電子メールにて調整する。